

起動動詞の補部に関する研究 —begin NP を例として—

藏 菌 和 也

(神戸学院大学)

1. はじめに

行為や出来事の開始を表す起動相の動詞 *begin* については、伝統文法の時代から、様々な議論が行われてきた。従来の研究では、*begin* や *start* のような補文に *to* 不定詞 (以降、*to V*) と動名詞 (以降、*Ving*) をとる動詞を考察し、*to V* と *Ving* の意味の違いを解明するというものが主流であった (Jespersen (1940), Freed (1979), Duffley (2006) などを参照)。一方、先行研究や英英辞書、英和辞典には、*begin+Noun Phrase* (以降、*begin NP*) のように名詞句を補部にとる場合の統語的・意味的な特徴に関する記述は、補部に *to V*, *Ving* がくる場合に関する記述に比べて少ない。

実際に、Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary 9th edition, Longman Dictionary of Contemporary English 6th edition, Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English 10th edition (以降、COBUILD9, LDCE6, OALD10) 等の英英辞書を見ると、(1) のように *begin NP* が、人や国などの主語をとり、*study, talks, work* や *his fourth year* のような年などの期間を表す名詞をとるといった特徴が推測できる (以降、下線や太字は筆者による)。また、LDCE6 はコーパスを使って *begin* に後続するパターンを図で示しており、その図からは、*begin* に後続するパターンの中でも最も使用される頻度が高いものは、(2) の一番左端に示した *to V* 構造であり、右に進むに従って使用頻度が低くなる事が分かる。また、*begin* の補部では動名詞 (*begin doing sth*) よりも、名詞 (*begin sth*) の方が高い頻度で使用されていることも分かる。

このように最近の辞書には、コーパスを用いた調査の結果が反映された記述が盛り込まれており、どのようなパターンがどれだけの頻度で *begin* の補部で用いられるかという情報まで記載されている。¹ ただ、先行研究を見てみると *begin* の補部において *Ving* と *NP* は (3) のように、書き換えが可能であると説明されて、どのような文脈で書き換えが可能なのかについては議論の余地があると考えられる。以上の背景から、本稿は、*begin NP* の持つ統語的・意味的特徴について詳細に記述することを目的とする。また、大規模汎用コーパスから得られたデータを基に *begin NP* と *begin Ving* が書き換え可能な文脈について検討する。²

- (1) a. In the third year, students begin the study of classical Chinese. / The president begins talks with the prime minister tonight. (LDCE6)
 b. He has just begun his fourth year in hiding. / He began his career as a sound editor. (COBUILD9)

- c. We began work on the project in May. (OALD10)
- (2) begin to do sth > begin (自動詞、目的語なし) > begin with sth > begin sth > begin doing sth > begin by doing sth > other
- (3) a. Larry and rover began/started discussing voting rights within the caucus.
 b. Larry and rover began/started the discussion of voting rights within the caucus. (Freed 1979: 83-4)

2. 名詞が持つ特徴

まず、*begin NP*に関する研究は少なく、さらに *begin V-ing/NP*の違いに関する記述は Freed (1979)を除いてほとんど見られないことを見た。本節では、名詞の性質の違いについて先行研究を概観し、次節で *begin NP*でどのような意味を持つ名詞が使われるか、その一般性について量的・質的調査をしていく。

2.1 名詞性の違い

動詞 *begin* は補部に *NP* だけではなく、*V-ing* や *to V* をとる。本章では、*begin* の補部にくる *NP* の性質をより詳細に考察するために、*V-ing*, *NP* それぞれの性質の相違に関する概観する。従来の文法理論では (4) に示す *that* 節 (*that*) や *to* 不定詞 (*for to*)、埋込疑問文 (*Q*) や動名詞付き対格 (*Acc Ing*)、所有格動名詞 (*Poss Ing*) や行為名詞化形 (*Action Nominal*、以降、行為名詞という)、派生名詞化形 (*Derived Nominal*、以降、派生名詞という) や名詞 (*Noun*) などの動詞の補文にすることができる要素は、それぞれ関連性のない個別の範疇として考えられてきた。しかし、Ross (1973) は生成意味論の立場から、実はそれぞれの補文には文らしさの度合いは大きい名詞らしさの度合いが小さい補文 (e.g. *that* 節、*to* 不定詞、など) から、名詞らしさの度合いは大きい文らしさの度合いが小さい補文 (e.g. 行為名詞、派生名詞、名詞など) まで存在しており、それぞれの範疇のもつ名詞らしさ及び文らしさの程度の違いが統語的テストによって確認できることを主張した。

(4) は、一番左端に位置する *that* 節から、一番右端に位置する名詞に進むに従って、補文の文らしさが小さくなる一方、名詞らしさが徐々に大きくなることを示している。それぞれの補文は、名詞らしさの点で程度の違いが存在することから、名詞性連続的階層体 (*Nouniness Squish* (Ross 1973)) を形成していると考えられている。(4) で示す補文の具体的な例を Ross (2004) から引用して (5) に示しておく。

- (4) *that* > *for to* > *Q* > *Acc Ing* > *Poss Ing* > *Action Nominal* > *Derived Nominal* > *Noun* (Ross 2004: 351)
- (5) a. *that* = *that*-clauses (*that* Max gave the letters to Frieda)
 b. *for to* = *for NP to V X* (*for* Max to have given the letters to Frieda)
 c. *Q* = embedded questions (*how willingly* Max gave the letters to Frieda)
 d. *Acc Ing* = (*Max giving* the letters to Frieda)

- e. Poss Ing = NP's V + ing X (Max's giving the letters to Frieda)
- f. Action Nominal (Max's/the giving of the letters to Frieda)
- g. Derived Nominal (Max's/the gift of the letters to Frieda)
- h. Noun (spatula) (ibid.: 351)

本稿で扱う派生名詞は、動名詞（それぞれ Ross (1973) のいう派生名詞と所有格動名詞に相当する）よりも名詞らしさ（名詞性）が強いことが分かる。派生名詞が持つ名詞らしさとは何かについては、以下で Grimshaw (1990) を概観することで確認していきたい。

2.2 名詞の下位分類

名詞と言えば具象名詞、抽象名詞などがまず思い浮かぶが、(i) 動詞や形容詞に *-ing/-ion/-ment/-ance/-er* などの接尾辞を付けて名詞化するという過程を経て形成される派生名詞や (ii) 動詞と形態が変わらない *talk, act, stay, guard* の様な転成名詞（影山 2011）などが、名詞の周辺の事例として存在する。派生名詞については、名詞化 (Nominalization) というテーマのもと広く議論が行われてきた (Lees (1960), Chomsky (1970), Grimshaw (1990) などを参照)。ここでは、派生名詞の性質を観察するため、精緻な考察に基づく、派生名詞の分類を行なった Grimshaw (1990) を概観したい。

まず、派生名詞 (6a) は (6b) に挙げたような動詞の補文構造に類似した構造を持っている。実際に、(6a) における動詞 *destroyed* の主語 *The enemy* と目的語 *the city* は、(6b) では派生名詞 *destruction* を修飾する所有格 (*enemy's*) と前置詞 *of*+名詞 (*of the city*) で表現することができる。

- (6) a. **The enemy's destruction of the city.**
- b. **The enemy destroyed the city.** (Grimshaw 1990: 46)

Grimshaw (1990: 45ff) では、このように動詞と類似した項構造を持つ、言い換えると動詞的な性質を持つ名詞を複雑事象名詞 (complex event nominal) に分類した。また、動詞のような項構造 (argument structure) を持たない、より名詞的な性質を持つ名詞を単純事象名詞 (simple event nominal) に分類した。さらに、名詞の元々の動詞が表す行為の結果生じた生産物を表す結果名詞 (result nominal) があることを説明した。

まず、単純事象名詞と複雑事象名詞について見ていく。単純事象名詞とは、*event, race, trip, exam* などの行為や出来事を表す名詞のことで、行為や出来事が起こったことを示す *take a long time, take place* などの表現と一緒に使うことができる (7a)。また、(7b) のように *frequent* や *constant* のようなアスペクトに関連付けられる修飾語と共起できない。これは、単純事象名詞が動詞的な性質よりも名詞的な性質が強く、相 (aspect) に関する情報は示さないことに起因する。名詞的な性質が強いからこそ「課題」を意味する *assignment* が (7c) のように不定冠詞と共起して可算名詞と同様の振る舞いをするすることができる。一方、複雑事象名詞とは、動詞的な特性が強い名詞である。動詞性の強い名詞なので、無標

の名詞が共起することができる不定冠詞とは共起しない (8a)。しかし、(8b,c) のように出来事が継続するか、完結するかというアスペクトに関する *in ~ hour, for ~ weeks* などの特定の時間表現と共起することができる。なお、*in*+時間句が共起するか、*for*+時間句が共起するかは、元の動詞の特性に依るということから考えても、動詞の性質をかかなりの程度引き継いでいると言える。

- (7) a. The event/race/trip/exam **took a long time/took place** at 6:00 P.M.
 b. *The **frequent** event was a nuisance. (Grimshaw 1990: 59)
 c. They studied **the/an/one/that** assignment. (ibid.: 54)
- (8) a. They observed **the/*an/*one/*that** assignment of the problem.
 (Grimshaw 1990: 54)
 b. The total destruction of the city **in only two days** appalled everyone.
 c. Only observation of the patient **for several weeks** can determine the most likely... (ibid.: 58)

次に、結果名詞とは (9a) の *examination/exam* のように試験のために作られた「試験問題」もしくは「試験問題の内容」のようにある行為の結果生じた具体的なものを表す名詞を指す。ただ、名詞の中には結果名詞としてのみ使われるのではなく、複雑事象名詞としても使うことができるものが存在する。例えば、(9b) の *examination* は「患者の検査」という過程を持った行為や出来事を表す複雑事象名詞として使われており、元々の動詞 *examine* の目的語である *patients* が前置詞 *of* の目的語として現れる (*The examination of the patients took a long time.*) が、結果名詞が使われるのと同様の文脈 (**The examination of the patients was on the table.*) では使われない。一方、(9a,b) の *exam* は「試験」という結果名詞としてしか使われない名詞であるため (9b) のような単純事象名詞のように *take a long time* と共起せず (**The exam of patients took a long time.*)、複雑事象名詞のように *of*+名詞句 を伴うこともない (**The exam of the patients was on the table.*) という。

- (9) a. The examination/exam was long/on the table.
 b. The examination/*exam of the patients took a long time/*was on the table.
 (Grimshaw 1990: 49)

ここまで、Grimshaw (1990) による名詞の分類について概観してきた。名詞にも (i) 動詞的性質が強く、*for/in*+時間句と共起でき、アスペクト的な意味を表すことができる複雑事象名詞のようなものから、(ii) アスペクト的な意味は表さず、可算名詞のように振る舞う名詞的性質が強い単純事象名詞があるということだ。また、複雑事象名詞と単純事象名詞どちらの解釈も可能な名詞も存在することを確認した。

2.3 名詞化することで生じる文体的な効果

ここまで、Grimshaw (1990) を概観しながら派生名詞が持つ統語的、意味的な特徴について確認してきた。次に、一般的な文法書において名詞化についてどのような説明が見られるかを確認していきたい。

まず、Swan (2016: 288) では “Nominalisation ... can help to make writing impersonal” と説明されている。動詞を名詞に変えて表現することにより、非人称の文、つまり個人についての記述ではなくより客観的な文になると説明されている。また、Carter and McCarthy (2006: 333) では “nominalized forms are more used in written and formal contexts” と説明されている。つまり、動詞から名詞に変えて表現することで書き言葉や形式張った印象を与えるということである。これらの記述から考えると、動詞よりも名詞で表現することで「非人称」「客観的」「書き言葉」「形式張った」といった意味合いの違いを表現できると考えられる。

2.4 begin NP に関する従来の考察

Freed (1979) では *begin* と *start* の補部には派生名詞がくること、さらにこの派生名詞と動名詞とは容易に書き換えが可能であると説明している。例えば、*begin* と *start* の補部に動名詞をとる (10a,c) はそれぞれ (10b,d) のような派生名詞に書き換えが可能であるという。以下の例は全て Freed (1979: 83-4) からの例である。

- (10) a. The district attorney began/started questioning the defendant.
 b. The district attorney began/started the questioning of the defendant.
 c. We began/started racing on time.
 d. We began/started the race on time.

また、*begin NP* と *start NP* の補文にどのような名詞がくるかを調査した中村 (2018) のような研究も見られる。中村 (2018) では当時 5.3 億語の大規模モニターコーパス The Corpus of Contemporary American English (以降、COCA) を使って [begin+a/an/the+名詞] と [start+a/an/the+名詞] で使われる名詞を量的に調査し、特に [begin+a/an/the+名詞] という表現形式では (11) のような語が使われると説明している。

- (11) a. collaboration, assault, love affair, rise, exploration, odyssey, sweep, ascent, shift, examination, push, engagement, evaluation, inventory, look, summit, comeback, transformation, term, demonstration.
 b. era, tale, poem, portion, prosecution, siege, destruction, portrait, rite, sage, switch, task, creation, description, gulf, impeachment, litany, pursuit, relaxation, sea.

中村 (2018: 56-59) は *begin* が不定冠詞 *a/an* をとる場合に共起する名詞について述べ

た (11a) を意味の観点から大まかに分類し、(i) *collaboration* のような「広く言うと他人との相互作用に関わる行為」であり、*love affair* にも言えるように「他人がいて成立する行為」を表す語、(ii) 「検査や探索に関連するもの」である *exploration, examination, evaluation, demonstration* などの語、(iii) *exploration, odyssey* などの「旅や探索に関係するもの」、(iv) *rise, ascent, shift, summit, comeback* などの「移動や方向性に関連するもの」がみられるという。

さらに *begin* が定冠詞 *the* をとる場合に共起する名詞について述べた (11b) には、主に (v) *era* のような意図性の低い語、(vi) 「言語やそれを伴う行為を表す名詞」(中村 2018: 58) である *tale, poem, description, narrative* や、やや比喩的で「言語を中心とした儀礼や制度」を表す *rite, litany, impeachment* 等の語、(vii) *task* のような「作業」を表す語に分類できるという。

また、まとめとして *begin* に共起する語として「言葉にまつわる」*tale, poem, description* などの語が多く、複数人の相互作用を表す語 *collaboration, demonstration* なども多いこと。相互作用には、言語で行う *examination* などの語やより儀式的・形式的な *impeachment, rite* 等など、さらに *assault* などのような争いに関係するものが含まれる。その他、主に旅に関連する *explanation, odyssey* も多いとしている。

2.5 従来の研究にみられる課題

ここまで先行研究を概観し、名詞と言っても結果名詞、単純事象名詞、複雑事象名詞など多様な名詞が存在し、不定冠詞や時間表現 (in/for ~ hours) と共起するか等の点で、それぞれが異なる統語的特徴を持っていることを見てきた。ただ、*begin* の補部にどのような語がくるのか、コロケーションの特徴と補部にくる語にみられる一般性については議論の余地があるようだ。

このことを踏まえて、次節以降では *begin* の補部にくる名詞にどのような意味的特性がみられるのかを観察する。さらに、Freed (1979) では *begin* の補部にくる動名詞と派生名詞は書き換えが可能だと説明しているが、どの様な語の場合に書き換え可能か、あるいはどのような文脈で書き換え可能かについて検討していく必要がある。

最後に、中村 (2018) は、*begin NP* にくる名詞コロケーションについて COCA を用いて量的に調査しているが、研究対象を特定の冠詞 (a/an/the) に後続する名詞 (a/an/the+NP) に限定している点で、少なくとも *begin talks* のような複数形の名詞を補部にとる場合の例を対象から除外しているため、限定的な調査に留まっており、当該構文で使われる典型的な名詞を十分に抽出できていない。このことから、次章以降では The British National Corpus (以降、BNC) を用いて、*begin NP* の形式においてどのような語が、どのような頻度で用いられるかについて量的及び質的調査を行なう。

3. *begin NP* と共起する語の調査

本章では、まず大規模汎用コーパスの一つで、イギリス英語の書き言葉及び話し言葉あわせて約 1 億語から成る BNC の共起語検索機能を用いて、*begin* が補部に *NP* をとる場

合にどのような語が、どのような頻度で使われるかについて量的調査の結果を提示する。そして、量的調査により得られたデータを基に *begin NP* の統語的特徴及び意味的特徴を記述していく。また、動名詞から派生名詞への書き換えが可能とされる *begin NP* と *begin V-ing* の 2 つの表現について、これらの表現の振る舞いを比較しながら、コーパス調査のデータに基づいて統語的・意味的な違いについて示していく。

3.1 共起語の調査結果

まず、統語的にどのような語が *begin NP* の補部で使われるかについて BNC を用いて調査を行なった。補部に用いられる単語を BNC の共起語検索機能を用いて抽出し、上位 10 語に関してリストアップした。それらのデータから研究対象以外の例を除外した結果が表 1. である。表中の単語は使用頻度が高い順にリストしている。

順位	補部にくる名詞	頻度
1	work	244
2	life	141
3	career	117
4	process	110
5	series	65
6	campaign	63
7	operation	60
8	investigation	54
9	study	44
10	discussion	43

表 1. BNC にみる *begin* の補部にくる名詞とその生起頻度³

4. 考察

本章では、BNC から得られたデータに基づいて、*begin NP* の補部にどのような性質の語が使われるか、さらに *begin V-ing* と比較し、書き換え可能とされる *begin NP* と *begin V-ing* を観察し、どのような語や文脈において書き換え可能なのかについて見ていく。

4.1 *begin NP* に広くみられる特徴

まず本節では、*begin NP* で用いられる名詞に広く共通する特徴について観察していきたい。表 1. を見てみると、基本的に *begin NP* には長い期間を通して行われる行為や出来事を表す名詞で、生活や仕事の開始を表す語 (*life, work, career*) が中心に使われている。また、経済的・軍事的・政治的な行為に関わる名詞 (*operation, campaign, discussion*)、

研究や調査に関する名詞 (*investigation, study*) などがくることが分かる。その中で、共通して見られるのが、(12) にみられるような長い期間の間行為が行われることを表す修飾語 (*long, month-long, lengthy, two-week, lifelong*) との共起である。インドで長く発行されてきた新聞の積み重ねて来た歴史 (または経歴) の長さ (12a) や怪我をした後のリハビリ過程の長さ (12b)、千夜一夜物語の登場人物シェヘラザードが語り始めた物語の長さ (12c) やアメリカ軍による化学兵器撤去作戦の期間 (12d)、ダグラス・マッカーサーによるレイテ島侵攻作戦の長さ (12e) や人権団体による政治的殺害に関する実態調査の期間 (12f)、鳥類研究が生涯に渡って行われているという場面で研究の長さ (12g) がそれぞれ太字で示した修飾語によって表現されているという特徴がみられた。ここから、*begin NP* には一つの場面における継続と言うよりも、より長い期間継続されると想定される行為を表す名詞が用いられると考えることができるだろう。

- (12) a. However, brief mention should be made here of the Indian press. The first of these papers was Indian Opinion, which began its **long** career in 1906, launched by Mahatma Gandhi. (BNC)
- b. As Byrd begins the **long** rehabilitation process which doctors hope will enable him to regain some movement, (BNC)
- c. Scheherezade begins the **long** series of tales that constitute The Arabian Nights, so successfully stimulating the King's curiosity to hear more that he constantly defers the order for her execution. (BNC)
- d. On July 26 the USA began a **month-long** operation to remove an estimated 100,000 chemical weapons from a storage depot in Clausen, West Germany. (BNC)
- e. MacArthur's major objective was now to recover the Philippines. In October 1944 his troops landed on Leyte Island to begin the **lengthy** campaign. (BNC)
- f. A team from the human rights organization Amnesty International arrived on Dec. 4 to begin a **two-week** investigation into political killings. (BNC)
- g. Much of his childhood he spent at Mottisfont Abbey, on the Test above Romsey; there he began his **lifelong** study of birds. (BNC)

また、(13a) で示す二国間の協議 (*bilateral discussions*) などに関しても、*discussions* のように複数形で示されていることから、ある一定期間を通して何度か協議が行われることが予想できる。また、(13b,c) の結婚生活や仕事に関しても、短い終焉を予想しながらを始めることは普通なく、長期間または一生を通して行われるものではないかと思われる。以上の観察を通して、人生の長い期間を通して行われる行為を表す名詞 (*work, career, life*) とある一定の期間をかけて行われる行為を表す名詞 (*series, operation, campaign,*

discussion, investigation, study) が *begin NP* で使われることが分かる。

- (13) a. United States Secretary of State James Baker indicated on Oct. 23 that the USA was prepared to begin bilateral discussions with Vietnam as a preliminary to the normalization of relations. (BNC)
- b. Most of us begin married life filled with hope and resolve. We want our marriages to last and our love for each other to grow. (BNC)
- c. ‘Ipuky is a civil servant. I am too young to remember but I think he began his career as a supervisor in the turquoise mines of the Northern Desert,’ (BNC)

4.2 begin V-ing との比較から見えるもの

本節では、*begin NP* と *begin V-ing* を比べるとどのような統語的・意味的相違が見られるのかについて考察を加える。まず、BNC を用いて *begin V-ing* にくる語を調査した藏菌 (2016: 107-8) では、当該形式で使われる頻度が高い語上位 10 位を示している。具体的には、*working, shipping, making, talking, writing, looking, walking, taking, moving, using, thinking* などの動名詞がこれにあたる。これらの中から、対応する名詞を持つ語 *working, shipping, talking, walking, moving, using, thinking* (それぞれに対応する名詞は *work, shipment, talk, walk, move/movement, use, thought* である) の使用を考察することで *begin V-ing* と *begin NP* を比較し、どの程度、どのような文脈で書き換えが可能なかを考察していく。

初めに、*begin working* を見てみると (14a) のように様態副詞と共起して、行為がどの様に展開したかを具体的に描写する場面での使用が見られる。一方、*begin NP* には *the hot sun* のような語を主語にとる例 (14b) が見られる。このことから行為の展開を表す場合には *begin V-ing* が、そして無生物主語をとり、より客観的な出来事として物事を描く場合には *begin NP* が好んで使われると予想できる。また、*begin work/working* は「仕事を開始する」や「とり組む」の意味で使われる場面 (15a,b) (16a,b) で書き換え可能であると言えそうだ。

- (14) a. In the reflected light of the fire he saw the silhouette of an entirely naked Moi female kneeling at his side, and as he watched, her hands began working rhythmically at some unseen task. (BNC)
- b. ... he looked in vain for help, but no prospect of escape animated him, and the hot sun began its dreadful work. (BNC)
- (15) a. In 1938 he began working as a graphic artist in New York, (BNC)
- b. She began work as a graduate trainee with the Bank of England (BNC)
- (16) a. While Mountbatten was still alive, Charles had begun working on many projects and (BNC)

- b. He began work on the rebuilding of the Cathedral at Rochester, and
(BNC)

次に、*begin shipping* と *begin shipment* を比べてみると前者は 53 例、後者は 8 例の使用が見られた。補部にくる *ship* という語の意味から考えると商品の出荷を行う主体は商品を取り扱う企業などであることが特徴である。名詞 *shipment* の用例を見ると、8 例とも (17a) のように具体的に何を出荷するかを *of* 名詞句で表している。このことは、「(ある組織が) (物を) 出荷/輸送する」という文脈で書き換えが可能だということを示唆している。具体的な商品を出荷/輸送するような対象に対して影響を与える他動性の強い行為は他動詞で表されるのが典型的なので、客観的な事実を描く名詞よりも他動詞 *ship* の *-ing* 形で (17b) のように表現した方が自然であることが影響しているのではないかと考えられる。

- (17) a. LOTUS SHIPS NOTES 3 Lotus Development Corp yesterday began shipments of Lotus Notes 3, which offers cross-system support and is available in a Macintosh client (BNC)
b. Towards the end of the month the United States air force began shipping 120 tonnes of food from military stocks left in Saudi Arabia after the Gulf war. (BNC)

では次に、名詞形を補部にとる場合と *-ing* 形をとる場合とで意味の違いが大きな *talk* という語について考察していく。使用頻度を比較してみると、名詞 *talk* の使用は 41 例、動名詞 *talking* の使用は 51 例見られた。例を見てみると、(18a) のように *talking* をとる場合にはテラスで行うような比較的堅苦しくない場面での会話を表すが、(18b) にみるように名詞 *talks* を使うとより堅苦しく、形式的な場面における協議の意味で主に使われる。*talk* は複数形 *talks* で使うと、“formal discussions between governments, organizations etc”を表す (LDCE6 sv. n., talk 2) という。一般的な会話から、協議や講演まで広い意味を持つ動詞の *-ing* 形である *talking* を使うよりも、組織間の協議という形式ばった行為を表す場合には、名詞化されて客観的で形式ばった含みをもつ名詞 *talk(s)* を用いた方が、どの意味で使っているのか聞き手や読み手も判断しやすい。このことから *begin talk(s)* は特に「協議の開始」の意味を表す際に使われると考えられる。

- (18) a. Eventually we made our way back to the terrace and sat down on a bank. We began talking in a general way about modern theologians. (BNC)
b. British and Irish Ministers have begun talks in Belfast on the political future of Northern Ireland. (BNC)

使われる形式によって意味が大きく異なる語は他にもみられる。*begin life* と *begin living*

について見てみよう。前者は 141 例の使用が見られるのに対して、後者は 8 例の使用が見られた。両者の大きな違いとして、*begin life* は (i) いわゆる「世に出る」のような意味で、会社などの組織がある役割を担って世の中に存在 (*exist*) し始めるといった場面 (19a) や (ii) 人が (時に、新たな職業に就いて) 新生活を始める場面 (19b) の両方で使われている。一方、*living* は新生活の開始を表す場面 (20) で使われるといった違いが見られる。一般的に、動名詞は動詞の進行形が持つ非完結性や一時性などの性質を持ち、名詞はモノを表す。そのため、恒常的な状態の意味 (先に述べた「存在 (*exist*)」の意味) を *begin living* の形式で表すことができないが、名詞はモノつまり非一時的、恒常的な性質を持ち形状も変わらない物体—を表すので、*begin life* のように恒常的な状態を表す「存在 (*exist*)」の意味で *life* が使われると考えられる。

- (19) a. **Many of the small British information technology firms began life** as importers and distributors of American-made systems. (BNC)
 b. He began life as a commercial photographer and worked for Renault, (BNC)
- (20) After Rigby ended the relationship, she began living with another musician, Michael Duane, at his flat in Leeds. (BNC)

では次に *begin walking* と *begin walk* を比較してみたい。動名詞での使用は 40 例、名詞での使用は 10 例見られた。(21a) から具体的に手足を動かした移動を表すことが分かる。名詞 *walk* を補部にとる場合は、文体的にどこか書き言葉で堅苦しく、(21b) のような物語等のフィクション作品で使われている例が 10 例中 7 例と多く見られた。

- (21) a. ‘Really?’ Alyssia said tightly. She began walking ahead quickly, and Piers kept up with her with long, easy strides. I hate this man, she thought hotly. (BNC)
 b. Her hair was like dripping rats’ tails, her jeans and sweat-shirt plastered to her body, and she thought she wanted to die. Wrapping her arms round herself in a futile attempt to retain some body-heat, she began the long walk back to the cottage. (BNC)

では、*move* の場合はどうであろうか。BNC での調査の結果、*begin moving* は 34 例、*begin move* は 16 例、*begin movement* は 10 例の使用例が観察された。(22a) を見ると行為がどの様に行われるかを表す様態副詞 *restlessly* と共起している。また、男性が部屋の中を落ち着きなく歩いく場面で使われており、具体的な移動が落ち着きなく行われている様子がうかがえる。一方、名詞 *begin move* を見ると、その主語にくる語は複数の人の集団 (植民地主義者) (22b) や国などの公的な機関による何らかの目的の達成に向けた「動き (action/activity) が始める」くらいの意味で使われていて具体的な動きの過程に関して

は述べられていない。さらに、(22c) を見てみると、サバ (mackerel) の群れ (shoals) の「移動」が開始されたことを述べており、人間以外の制御できない行為の開始を客観的に述べている点で、より客観性が高い場面で使用されていることが分かる。

- (22) a. He stood up and began moving restlessly around the room, fiddling with books and ornaments and adjusting the glasses and cutlery on the table laid ready for their meal. (BNC)
- b. Two years ago, while Iran was occupied in this all-out aggressive war, the **colonialists** began their moves to reduce oil prices. (BNC)
- c. Even more inventive was the route by which early-season mackerel reached London, for the price dropped rapidly once **the shoals** began their seasonal movement up the English Channel. (BNC)

このほか、*begin using* は 29 例みられたが、*begin use* といった表現は BNC では観察されなかった。動名詞 *using* の目的語には (23a,b) のように具体的に手や口を動かして使う言葉や道具などがきている。文主語である人や人型ロボットが何らかの意図をもって言葉や道具等を使うという主体的な行為を表す性質上、名詞で *begin use of* ~ のように表すのではなく目的語をとることができる他動詞 *use* の *-ing* 形が選ばれるものと考えられる。また、*begin thinking* も前置詞 *of/about* などを伴って (23c) のように具体的に何かを「考える」という主体的な行為を表す例が 29 例と多い。一方、*begin thought* の使用は (23d) の 1 例のみに限られている。名詞は非主体的な非人称の文で使われる。そのため、「(主体的に) (何かについて) 考え始める」という動作主性が高い行為を表す場合、*thought* の使用が避けられるものと考えられる。

- (23) a. This view has led a number of researchers to question whether some groups of children are slow to develop language because their pre-verbal social and cognitive abilities have not developed to the point where the child is ready to begin using spoken or sign language. (BNC)
- b. EVOLVING humanoids grew more intelligent at about the time they began using tools to hunt; this finding has encouraged anthropologists to speculate that it was tool use that made intelligence particularly adaptive. (BNC)
- c. ... we need to begin thinking about the research processes in such generic terms. (BNC)
- d. As data accumulates there begins a thought concept of life based on data gathering and evaluating. (BNC)

5. 議論

この章では、*begin NP*の持つ特徴について整理しながら、なぜ特定の語がこの形式で使われやすいのかについて議論していく。また、*begin*の補部にくる *NP*と *V-ing*の持つ特性の違いが補部にくる語の選択に大きな影響を与えていることを論じていく。

5.1 *begin NP*の特徴

本稿では、BNCを使って *begin NP*の補部にくる語の実態について調査を行なった。実際の例を考察していくことで、*begin NP*の補部には「長期間にわたって継続されると想定される行為や出来事を表す」という共通の意味特性を持つ修飾語が共起する *work, life, career, process, operation, campaign, investigation, study, discussion*などの名詞が多くみられることが明らかになった。では、なぜこのような意味特性を持つ名詞が後続しやすいのかについて考えてみたい。

Wierzbicka (1988: 78) では、*begin*は開始後の行為がある程度進展している段階 (*first part*)を表す語であるとされている。*begin*という動詞が行為の進展の意味、言い換えると開始された行為の継続の意味を含意する動詞であるということが、*begin NP*の補部に「長期間にわたって継続されると想定される行為や出来事を表す」名詞が使われる頻度が高いという事実に深く関係していると考えられる。つまり、*begin*という語彙が補部にくる語に「継続性」の意味を要求する語であることが *begin NP*の補部にくる名詞の選択に影響しているということだ。

また、*begin life/talk(s)*のように、補部の語が名詞形で使われた場合に特有の意味を表す例も観察された。動名詞を後続させる *begin living*ではなく名詞を補部にとる *begin life*が「人・企業などの組織が存在 (*exist*)し始める (いわゆる「世に出る」)」という意味を表すのは、名詞が典型的に表すのが「恒常的に存在するモノ」であることと深く関係している。この名詞の持つ性質と「存在する (*exist*)」という語の持つ恒常性とが親和性を持つからこそ、動名詞ではなく名詞が後続する *begin life*という表現が可能になると考えられる。そして、名詞が複数形を持つという性質を利用して *begin talks*という表現が企業や国家などの組織間の協議の開始を表すという特徴を持ち、*begin talking*との使い分けが行われていることが観察された。名詞化が客観的、非人称的、堅苦しいという意味を付加するという要素も、*begin talking*と比べて *begin talks*が国家などの協議の開始を表す表現として典型的に使われているという現象と深く関係していると考えられる。

ただ、*begin moving*で見たように様態副詞を伴って動作がどの様に進展したのかを表したり、*begin shipping/using/thinking*で見えてきたように動作の対象である目的語をとったりする場合には、名詞よりも動名詞が使われやすい。これは、動作の進展といった具体的な記述には、動詞的な性質が強いので動名詞が使われることに起因する。また、目的語に影響を与える他動性を持つ動詞 *ship/use/think of/about*が補部で使われる場合には、派生名詞よりも他動詞の *-ing*形 (動名詞) が好まれる。これは、動詞的な性質が弱い派生名詞に *of*+名詞句を付け加えるのではなく、元から他動詞構造を持つ動詞を *-ing*形にして表現した方が労力もかからない生産的な方法であることが大きな理由の一つとして考えられる。

また、行為を表さないような、例えば *began its long career* といった名詞は、仕事に関して「長年積み重ねてきた歴史」を想像してみると、そこには長年、仕事を続けてきたという「過程」の意味を見出すことができる。このような例から考えてみても、語彙の中に、ある程度の時間幅を見出すことができる名詞は *begin* の補部で使われると考えられる。名詞が持つ「客観的」といった意味や、「書き言葉」や「形式的」な場面で使うという特徴もまた、*begin NP* において *begin V-ing* とは違った語彙選択が行われ、「協議」や「存在」の開始を表すといった特有の特徴がみられる大きな要因の一つと言えるだろう。

6. 結語

本稿では、大規模汎用コーパスを用いた事例に基づく用例調査から *begin NP* という形式においてどのような語が用いられるのか、さらになぜ特定の性質を持つ語がこの形式において用いられるのかについて、*begin* の語彙的な意味と名詞が持つ性質が関係していることを実証的に示した。具体的には、(i) *begin* が持つ「過程/継続」の意味を持つ要素を補部に要求するという性質が (ii) 名詞の中でも *begin NP* の形式で使われる行為や出来事を表す名詞が「長期間にわたって継続されると想定される行為や出来事を表す」という共通の意味特性を持つという現象に影響を及ぼしていることをコーパスの事例と名詞の持つ意味の観点から明らかにした。

謝辞. 本稿は、2020年8月10日(月)に開催された日本英語コミュニケーション学会関西地区研究フォーラムにおいて口頭で発表した内容を加筆・修正したものである。発表時にコメントを頂いたフロアの先生方及び査読委員の先生方に感謝申上げたい。なお、本稿は、JSPS 科研費 JP21K13029 の助成を受けたものである。

注

1. 統計的な手法を使って *begin* のとるパターンと使用域について論じた研究に Biber, Conrad and Radden (1998) がある。この論文では、*begin NP* はフィクションでの使用よりも学術散文における使用の方が多くみられるという。
2. ただし、He has begun a new book. (小西(編) 1980: 119) のようにモノを表す名詞を目的語にとり、文脈に応じて *began (writing, reading, translating, typing) the book* のように動名詞を補って意味を解釈する必要がある構造に関しては、本研究で扱う *begin NP* とは構造が異なるため、調査の対象外としている。
3. 検索式([lemma="begin"] [tag="NN.|AJ.|AV.|DPS|PN.|AT0"]{0,3} [tag="N.*"]) を使って、*begin* の右3語以内に生起する名詞を抽出し、生起頻度の高い名詞のうち上位10語について質的調査を行なった。ただし、次のような例は対象から除外した。
 - (a) ... 'commodity exchange (a necessary prerequisite to capitalism) **begins where community life ends**'. (BNC)
 - (b) ... Mr Zhivkov's grandson **began a five-year study course** in Switzerland (BNC)

引用文献

- Biber, Douglas, Susan. Conrad and Randi. Rappen (1998). *Corpus Linguistics: Investigating Language Structure and Use*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Chomsky, Noam (1970) “Remarks on Nominalization,” in R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum (eds.) *Reading in English Transformational Grammar*, 184-221, Gin and Company, Waltham, MA.
- Carter, Ronald and Michael. McCarthy (2006) *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide. Spoken and Written English*. Cambridge University Press,
- Duffley, J. Patrick (2006) *The English Gerund-Participle: A Comparison with the Infinitive*, Peter Lang, New York.
- Freed, Alice, F. (1979) *The Semantics of English Aspectual Complementation*, D. Reidel,, Dordrecht.
- Grimshaw, Jane. (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jespersen, Otto. (1940) *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part 5, Syntax, Vol 4*, George Allen & Unwin, London.
- Lees, Robert, B. (1960) *The Grammar of English Nominalizations*, Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics, Bloomington, Indiana.
- Ross, John. (2004 [1973]). “Nouniness,” in B. Aarts, D. Denison, E. Keizer and G. Popova (eds.), *Fuzzy Grammar: A Reader*, 351–422, Oxford University Press, Oxford. [First published in 1973: in Osamu Fujimura (ed.), *Three Dimensions of Linguistic Research*, 137-257, TEC, Tokyo.]
- 影山太郎. (2011). 『日英対照名詞の意味と構文』 東京：大修館.
- 藏菌和也. (2016). 「起動動詞 begin と start に後続する to 不定詞及び動名詞補文の性質」 『英語語法文法研究』 第 23 号, 102-117.
- 小西友七 (編). (1980). 『英語基本動詞辞典』 東京：研究社.
- 中村文紀 (2018). 「コーパスに基づく類義語分析—start/begin + 名詞を例に—」 『北里大学一般教育紀要』 第 23 卷, 49-61.

辞書

Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary, 9th ed., 2018, HarperCollins, Glasgow.

Longman Dictionary of Contemporary English, 6th ed., 2014, Pearson Education, Essex.

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, 10th ed., 2020, Oxford University Press, Oxford.

コーパス

The British National Corpus (The Sketch Engine で検索した)